



備前焼陶友会と 岡山県備前陶芸美術館

宮本 俊二

1. 備前焼の歴史と特徴

備前は、日本の六古窯といわれている瀬戸・常滑・丹波・越前・信楽・備前のなかでも、最も古い窯場のひとつです。その特徴は、うわぐすりをかけず、昔ながらの登り窯、松割り木の燃料を使用し、長時間かけて焼き締める点で、窯内での炎のあたり具合や灰の降り掛かり具合など、自然的な要素の融合によって生み出される素朴で、手づくりのぬくもりの感じられるところです。

備前焼の歴史は古く、古墳時代の須恵器（すえき）の製法が次第に変化し、平安時代に熊山のふもとで碗・皿・盤や瓦などの生活用器が生産されたのが始まりといわれています。その後、鎌倉時代では主に山土を主体とした粘土による壺・甕・すり鉢が多く作られました。また、この頃から次第に現在の備前焼特有の赤褐色の焼肌の焼き物が作られ始めました。そして室町時代の終わり頃から、「ひよせ」と呼ばれる伊部の地から採取した粘土が使用されはじめ、ロクロを用いた成形により量産されるようになりました。また、大型の穴窯で焼かれるようになりました。

その後、江戸時代になると藩の保護・統制もあり、小規模の窯が統合され、南・北・西に本格的な大規模な共同窯（大窯）が築かれ、窯元六姓（木村・森・頓宮・寺見・大甕・金重）による製造体制が整いました。このころからこれまで作ってきた茶陶器などの他に、細工物といわれる布袋、獅子などの置物や香炉なども作られるようになりました。その一方で、酒徳利、水甕、すり鉢、種つぼなどの実用品も多量に生産されました。この頃から、京都・有田・瀬戸などで生産される磁器が脚光を浴びるようになったため、備前焼は知名度を下げる時代となりました。しかし、金重陶陽が昭和31年 国重要無形文化財保持者（人間国宝）に指定されたこととともに、備前焼の多くの窯元が努力した結果、国内のみならず、海外でも純日本的な備前焼の人気が高まり、現在の備前焼としての知名度を確

立させることができました。そして現在に至るまで、5人の人間国宝を輩出しています。

2. 備前焼陶友会について

岡山県備前焼陶友会は、岡山県内の備前焼作家、窯元、陶商が伝統の保存と継承、会員の融和、親睦を目的に設立したものです。この事務局は備前焼伝統産業会館2階にあります。もともとは備前焼関係者の融和、親睦のために、それまで存在していた陶工会、工芸会を統合、親睦団体として備前焼陶友会を昭和27年に設立したのが始まりです。その後、数々の取り組みを行って行く中で、昭和48年に協同組合岡山県備前焼陶友会として現在の体制となりました。現在の会員は173名（平成25年4月1日 現在）です。この陶友会における備前焼の振興の大きな取り組みとして、岡山県備前陶芸美術館、備前焼伝統産業会館の設立・運営が上げられます。また昭和58年より開始し、今年で第31回となる備前焼まつり（平成25年10月19日、20日）は最も大きなイベントの一つです。このほか備前陶芸センターでの研修などの後継者の養成、需要の拡大、窯の煤煙公害対策などに取り組むのみならず、社会福祉事業や史跡保存などにも積極的に参加しています。また、人間国宝となられた金重陶陽、藤原 啓、山本陶秀、藤原 雄、伊勢崎 淳とともに陶友会の一員として活動をしてきている点も他の産地と少し異なる点です。

3. 岡山県備前陶芸美術館

千年の歴史を持った備前焼について、古備前から現代に至る作品および備前焼に関する資料を一堂に集め、展示・公開・解説することによって、備前焼の普及と振興を図り、地域文化の向上に寄与するという目的のもと、昭和50年に（財）岡山県備前陶芸会館として協同組合備前焼陶友会により設立されました。その後、昭和62年に名称を変更し、さらに、平成25年より現在の（一財）岡山県備前陶芸美術館となっています。建物は4階建てで、それぞれの階で備前焼の歴史や特徴、独特の作風などが体験できます。

1階では、採土から窯出しまでの製作の工程や多様な窯変などについて、作品と写真などでわかりやすく説明されています。また、現在活躍する陶芸作家の代表的な作品なども展示されています。2階では、古墳時代の須恵器の製法から変化し、鎌倉時代に確立された備前焼の作品が展示されています。また室町時代末期に生産された生活用品としてのすり鉢、大甕や茶陶器などの展示もあります。さらに、江戸時代に磁器生

産の技術の取り込みなど試みられたことも紹介されており、彩色を施した備前など貴重な作品も展示されています。3階では、これまで輩出してきた金重陶陽、藤原 啓、山本陶秀、藤原 雄、伊勢崎 淳の5人の人間国宝の代表的な作品を展示しており、卓越した人間国宝の技に触れることができます。また、それぞれの作風の違いなども見て取ることができます。4階では、物故作家の作品を展示しています。

ここでは、1000年以上の伝統だけでなく、伝統技術にそれぞれの時代背景などが反映した作品を見ることができます。また現代の感覚を取り込み、伝統技術と融合した個性にあふれた作品についても展示されており、過去から現在までの備前焼を体感できることと思います。

4. おわりに

今回、岡山県備前陶芸美術館に隣接する備前焼伝統産業会館については、紹介できませんでしたが、こちらについても2階に陶友会会員の作家や窯元の新作を一堂に集めて展示販売しており、その数は約4000点以上におよび豊かな個性が見て取れるかと思えます。

備前焼の土味を生かした焼成、姿の美しさによって生み出された枯淡で素朴な味は、時代の風潮とか流行を超越して、多くの人々に愛されてきました。素朴、土の味、手づくりのぬくもり感など、生活にうるおいを与えるものとして、備前焼に興味を持っていただければと思います。



図1 (左) 備前焼陶友会の事務局がある備前焼伝統産業会館と (右) 岡山県備前陶芸美術館



図2 備前陶芸美術館1階に展示される大甕



図3 人間国宝 金重陶陽 陶像



図4 歴代人間国宝(備前焼)の作品

■筆者紹介 宮本 俊二

協同組合 岡山県備前焼陶友会 専務理事
〒705-0001 岡山県備前市伊部 1657-7

[投稿歓迎-編集委員会では「ほっと」spring 欄への会員からの投稿を歓迎します。編集事務局までご一報ください。]